

内村鑑三著「代表的日本人 - 西郷隆盛(新日本の創設者) - 」

岩波文庫(ワイド版)、岩波書店 1997年9月16日刊を読む

代表的日本人 - 西郷隆盛(新日本の創設者) -

### 1. 維新革命における役割

- (1) ある意味で 1868 年の日本の維新革命は西郷の革命であった。
- (2) 西郷なくして革命が可能であったか。
- (3) 必要だったのは、すべてを始動させる原動力であり、運動を作り出し、「天」の全能の法にもとづき、運動の方向を定める精神。
- (4) 我々が一戦を交えたとこの罪もない(江戸の)人々が我々のせいで苦しむことになる。

### 2. 文明の定義

- (1) 文明とは正義のひろく行われることである。豪壮な邸宅、衣服の華美、外観の壮麗さではない。
- (2) 我が家の法、人知るや否や 児孫のため美田を買わず
- (3) 私は 13 年間いっしょに暮らしましたが、一度も下男を叱る姿を見かけたことはありません。ふとんの上げ下ろし、との開け閉(た)て、その他身の回りのことはたいてい自分でしました。でも他人が西郷のためにしようとするのを遮ることはありませんでした。また手伝おうとする申し出を断ることもありませんでした。まるで子供みたいに無頓着で無邪気でした。

### 3. 天地敬愛

- (1) 天はあらゆる人を同一に愛する。ゆえに我々も自分を愛するように人を愛さなければならない。
- (2) 「天」には真心をこめて接しなければならず、さもなければ、その道について知ることはできない。すべての知恵は、人の心と志の誠によってのみ得られる。心が清く心が高ければ、たとえ議場でも戦場でも、必要に応じて道は手近に得られる。常に策動をはかるものは危機が迫るとき無策。
- (3) 誠の世界は密室である。その中で強い人は、どこにあっても強い。
- (4) 人の成功は自分に克つにあり、失敗は自分を愛するにある。八分どおり成功していながら残り二分のところでも失敗する人が多いのはなぜか。それは成功がみえるとともに自己愛が生じ、つつ

しみが消え、楽を望み、仕事を厭うから、失敗するのである。

- (5) それゆえに、命懸けで人生のあらゆる危機に臨まなくてはならない。責任ある地位につき、なにかの行動を申し出るときは命を懸ける。
- (6) 命も要らず、名も要らず、位も要らず、という人こそもっとも扱いにくい人である。だが、このような人こそ、人生の困難を共にすることのできる人物である。また、このような人こそ、国家に偉大な貢献をすることのできる人物である。
- (7) 断じて行えば、鬼神もこれを避ける。
- (8) 機会には二種ある。求めずに訪れる機会と我々の作る機会とである。世間でふつうに言う機会は前者である。しかし、真の機会は、時勢に応じ理にかなって我々の行動するときに訪れるものである。大事なときには、機会は我々が作り出さなければならない。
- (9) どんな方法や制度のことを論じようとも、それを動かす人がいなければ駄目である。まず人物、次が手段のはたらきである。人物こそ第一の宝であり、我々はみな人物になるよう心掛けなくてはならない。
- (10) 「正義」ほど天下に大事なものは無い。自分の命はもちろん、国家さえも「正義」より大事ではない。
- (11) 正道を歩み、正義のためなら国家とともに倒れる精神がなければ、外国と満足できる交際は期待できない。その強大を恐れ、和平を乞い、みじめにもその意に従うならば、ただちに外国の侮辱を招く。その結果、友好的な関係は終わりを告げ、最後には、外国につかえることになる。
- (12) とにかく、国家の名誉が損なわれるならば、たとえ国家の存在が危うくならうとも政府は正義と大義の道にしたがうのが明らかな本務である。戦争ということばにおびえ、安易な平和を買うことのみを汲々とするのは、商法支配所と呼ばれるべきであり、もはや政府と呼ぶべきではない。
- (13) 正しかれ、恐れるな。
- (14) 新政府においては、天皇はあるべき地位についていただく。それは親しく国政にあたり、そうすることで天皇の天職をまっとうすることである。

#### 4. 生財

- (1) 「左伝」にこう書かれている。徳は結果として財をもたらす本である。徳が多ければ、財はそれにしたがって生じる。徳が少なければ、同じように財もへる。財は国土をうるおし、国民に安らぎを与えることにより生じるものだからである。
- (2) 小人は自分を利するを目的とする。君子は民を利するを目的とする。前者は利己をはかってほ

るびる。後者は公の精神に立って栄える。生き方しだいで、盛衰、貧富、興亡、生死がある。用心すべきではないか。

(3) 世人は言う。「取れば富み、与えれば失う」と。何という間違いか。農業にたえよう。けちな農夫は種を惜しんで萌(ま)き、座して秋の収穫を待つ。もたらされるものは餓死のみである。良い農夫は良い種を蒔き、全力をつくして育てる。穀物は百倍の力実りでもたらし、農夫の収穫はあり余る。ただ集めることを図るものは、収穫することを知らず、植え育てることを知らない。賢者は植え育てることに精をだすので、収穫は求めなくても訪れる。

(4) 徳に励む者には、財は求めなくても生じる。したがって、世の人が損と呼ぶものは損ではなく、得と呼ぶものは徳ではない。いにしへの聖人は、民を恵み、与えることを得とみて、民から取ることを損とみた。今はまるで反対だ。

(5) ああ、聖人の道に反して、民に豊かさを求めることが「賢」といえるだろうか。損得の法(真の)に反して国土の繁栄をはかることが「不賢」といえるだろうか。賢者はほどこすために節約する。自分の困苦を気にせず、ひとの困苦を気にする。こうして財は、泉から水が湧き出るように、自分のもとに流れ込む。恵みが降り注ぎ、人々はその恩沢に浴する。これはみな、賢者が徳と財との正しい関係を知り、結果でなく原因を求めるからである。

#### [ コメント ]

日本を近代国家として導いた西郷隆盛を「代表的日本人」の第一に挙げた内村鑑三先生の「後世への最大遺物、デンマーク国の話」と並ぶ代表作。自分が死んだ後、世の中に何が遺せるかは、一人ひとりの生き方を自分の力で考えるのに最も良いテーマである。この2冊の本は、何回でも、また、神長大使の教えて下さったように最低「6回」は一生の間にじっくり読み、自らを省みるきっかけとしたい。

- 2009年10月31日 シンガポールからヨハネスブルクに向かうインド洋上空にて書き写す  
林明夫記 -